

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

自分たちが変える社会

木津川市立梅美台小学校 六年 佐藤 壮剣

ぼくは、ニュースやネットで、毎日のように、殺人事件や、火災が起きたというのを見かける。その事件の犯人の供述を聞いただけで、

「この人の将来は苦しくなるだろうな。」

と、思い、また、怒りと悲しみが一気に込み上がってくる。そして、犯罪を犯した人の将来を考えていると、不思議と自分が苦しくなってしまう。なぜなら、一度、友達をこまらせるようなことをしてしまったからだ。

ぼくが三年生だったころ、遊びのつもりで、友達の筆箱を触って、友達が見えないような場所にかくした。そのときぼくは、

「かくしたとしても、自分が後であの子に何かないのか聞いて、見つければいいや。」

と思っていた。その時はまだ、まさか先生に聞くまではせず、なんとか自分で見つけ出すと思っていた。しかし、友達は近くの人に

「ぼくの筆箱どこにあるか知らない。」

と少しだけ聞くと、先生に筆箱がないと伝えた。そして、先生がみんなに、

「筆箱どこにあるか知らないですか。」

と聞かれたとき、どきとした。聞かれてすぐに、筆箱の所へ行き、探しているふりをして、

「あった。」

と言った。そのときは、反省の心はなく、

「危なかったな。セーフだったな。」

と思うだけだった。

数ヶ月たったある日、そうじが終わったので、次の授業の準備をしていると、机に置いてあったはずの筆箱が姿を消していた。初めは、すぐ見つかるだろうと思い、机の周りを簡単に探したが、見つからなかった。

「もっとちゃんと探そう。」

と思い、もう一度机の周りや机の中を入念に探したがやはりなかった。ないことを確認すると、すぐに自分のロッカーへと足を急がせた。そしてまた、ロッカー周辺と、ランドセルの中を、探して探した。しっかり探したのに、結果は前と同じで、やはりなかった。最後にもう一度ロッカーを探して、自分の机を通り過ぎようとしたその時、今度は突然と筆箱が姿を現したのだ。ぼくが筆箱を見つけたときは、混乱しかなかった。まったく理解が追いつかなかったが、なんとか心を落ち着かせて、一つ一つ状況を把握していった。筆箱がなぜ突然なくなって、突然出てきたのか考えていると、ふと、友達の筆箱をかくしたことを思いついた。ぼくは、その子の気持ちが分かった。それは、

「ものがなくなると、困り、混乱し、悲しくなる」

ということだ。ぼくは、相手が「困る」ということは知っていたが心のブレーキがかけられずにやってしまったのだ。しかし、自分の筆箱がなくなったことで、「混乱」し、悲しくなる気持ちを理解した。今回は筆箱だったが、もしかしたら、なにか大事なものがなくなって、命に関わることだってあるかもしれない。だから、もう相手のことを考えない行動はしないでおうと、ぼくは思った。

殺人事件などの事件を犯してしまった人の供述を聞いて、自分が苦しむ、ということは、人の物を勝手に触って、困らせてしまった経験から、まちがったことをすることの重みを知れたのだとぼくは思う。犯罪を犯すことは、ゆるされないことだが、ぼくは、犯人の身にも、何か問題があって、犯罪を犯してしまったのではないかと考える。だから、犯人だけをせめないで、広い心を持ち、悪いことをした人にも理由を聞いて、少しでも悪いことをした人によりそえるようなやさしい社会をつくりたい。そのために、一歩でも自分がそういう社会をつくりたいと思った。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

温かく包まれる社会を

精華町立山田荘小学校 六年 中村 菜花

民法改正で二〇二二年から、成人年齢が十八歳になります。それにともない、今、少年法の適用年齢を二〇歳未満から十八歳未満に引き下げるべきかどうかという議論が繰り広げられていることを最近のニュースで知りました。この少年法適用年齢の引き下げには、それぞれ賛否があり、賛成の考え方には、凶悪な少年事件が後を絶たないから引き下げるのが妥当であるという意見や、民法の成人年齢と統一すべきであるという意見が出ています。一方、反対の考え方には、少年事件は十年前の三分の一に減少しているため引き下げる必要はないという意見や、現在の制度がうまく機能しているので変える必要はないという意見があります。私は、少年法の適用が二〇歳未満と十八歳未満では、どのようなメリットとデメリットがあるのか考えてみました。

まず、現行の二〇歳未満の場合のメリットは、十八歳や十九歳の少年が罪を犯した場合にニュースや新聞に実名が出されず、更生するチャンスが与えられます。心を改め、新しい道を歩んで行きやすいと言えます。しかし、罪を犯しても少年法で守ってもらえるから刑罰を負わなくてもいいと考え、簡単に罪を犯してしまう悲しい心の持ち主を生んでしまうというデメリットがあります。

次に、十八歳未満に引き下げられた場合のメリットを考えます。少年らの犯罪により、被害者は、かけがえのない大切な人を奪われたり傷つけられたり悲しみは計り知れないと思います。被害者、遺族にとって、犯人が成人であろうと少年であろうと相応の罪を償ってほしいと願うものです。少年法は加害者の保護・更生に重点を置いており、被害者の救済にはつながっていません。適用年齢を引き下げ、罪に応じた報いを受けさせることや、成人の裁判と同様に、被害者参加制度で事件の情報を得られたりするのであれば、被害者遺族の感情への配りよができると思います。しかし、少年の更生の機会は奪われてしまいます。

私は、少年法適用年齢を十八歳未満に引き下げること賛成です。罪を犯すということは重大なことなので、十八歳、十九歳の少年にも適切な厳罰化をすすめるべきです。凶悪な犯罪に対する刑罰も負わせることができるので、少年に自分のしたことの責任を負わせることができます。またこのことが少年犯罪の抑止効果にもつながります。一方で、それが少年の更生の機会を奪ってしまうことには心が痛みます。刑務所を退所してから一生罪を償っていかうと反省している少年に周りの人たちが、

「あの人は、刑務所で服役していた人だ。」と、白い目で見たり差別をしたりするのはよくないことです。残念ながら、今の社会は、前科のある人たちへの偏見や差別が横行し、罪を犯した人が更生しにくい社会だと思います。だから、どんな人でも包み込むような温かい社会を築くことが大切ではないでしょうか。温かい社会とは、人と人があいさつや、会話を通してつながりあい、互いを思い合って接することができる社会だと思います。家族や友だち、先生、地域の人たちなど、周りにいる誰かが自分のことを見てくれている、自分の気持ちを理解してくれていると分かれば、犯罪も起こりにくく、もし、何かの過ちがあったとしても、受け入れてもらえるので更生しやすいと私は考えます。

今の世の中は、これまで当たり前になっていたことができなくなったりして、これまで以上に家族や友だちのありがたみを感じます。私自身も、家庭や学校、地域でいろいろな人と関わり合いながら絆を深め、温かい社会を築く一員でありたいと思います。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

子どもの笑顔があふれる社会へ

舞鶴市立高野小学校 六年 保田 百合子

最近、私の心を痛めるようなニュースを耳にしました。それは、親からの虐待によって幼児が死亡したという事件です。虐待のニュースをたくさん聞く中でも、特に私が悲しくなったものは、三歳の子どもを八日間も置き去りにして旅行に行ったという親の話です。残念なことに、その子どもは亡くなってしまいました。

私には二歳の弟がいて、弟のことをとてもかわいく思っています。だから、どうしてそんなひどいことができるのか分かりませんでした。でも、弟が泣き止まない時、私は少しイライラしてしまいます。もし私と弟、二人だけだとしたら、もっとイライラしてしまうと思います。そんなイライラが積み重なって、虐待という犯罪が起きてしまうのだらうなと私は思いました。ニュースの親もきっと、子どもと二人だけで、周りに頼れる人もいなくて、つらくなってしまったんだと思います。

つらくなった時には、その気持ちをためこまず、だれかに相談したり頼ったりすることが大切だと思います。だれかが助けてくれると思うと安心するし、つらい気持ちをなくすことができるからです。世の中には、つらい気持ちをためこんでしまい、子どもを虐待することでストレスを発散させる人もいます。子どもは小さくても人形じゃなくて、みんなと同じ人間です。虐待を受けると、大人と同じように傷つきます。自分の苦しい気持ちを解消するためにだれかを傷つけるなんて、ひどいことだと思います。

私は母から、子どもを一時的に預けることができる施設があるという話を聞いたことがあります。私は、子育てにたえきれなくなった親にぴったりだと思いました。施設に子どもを預けている間、親は休むことができます。

また、子育て中に悩みを相談できるところや、地域で助け合えるようなところがあるといいと思いました。私の家では、用事がある時には、おばあちゃんが二歳の弟を見てくれます。だから、母はとても助かっていると思いま

す。みんなの身近にそういう存在があったら、きっと安心して子育てができると思います。

私は、ある詩に出会いました。それは、ドロシー・ロー・ノルトの「子ども」という作品です。その一部に

「安心を経験した子どもは信頼をおぼえる」

「可愛がられ抱きしめられた子どもは、世界中の愛情を感じとることをおぼえる」

という言葉があります。私は特にこの部分が気に入りました。

虐待を受けた子ども、つまり親に愛されなかった子どもは、また自分の子どもに虐待をしてしまうと聞いたことがあります。だからこの詩のように、子どもが安心できる社会、子どもがたくさん愛情を感じとることができる社会をつくっていきたいです。虐待という悲しい犯罪がなくなるように、そして子どもたちの笑顔があふれる社会になるように、みんなで力を合わせていきたいです。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

本当の鬼退治をするために

舞鶴市立加佐中学校 三年 江口 魁音

僕たちは身の回りで起こる出来事を、一方的な視点からばかり見ているということはないでしょうか。

僕は昨年、道徳の時間に「桃太郎の鬼退治」という教材に出会いました。昔話の桃太郎は鬼をたおして村人を救ったヒーローですが、この教材には、「めでたし、めでたし。」の続きに、「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」という一言が加えられており、その鬼の子どもの言葉から考えを深めるというものでした。ぼくは、この鬼の子どもの一言に、とても大きく心を揺さぶられました。

ぼくはこの鬼の子どもの言葉を読むまで、鬼と言えば怖いイメージがあったので「鬼は悪党。」桃太郎は鬼から村人を救ったとても素晴らしい人物で「桃太郎はヒーロー」という固定観念がありました。僕は桃太郎を支持し、鬼を悪者と思い込んでいました。でも、確かに鬼は、桃太郎によって殺されたのです。このことにより、最初は加害者だった鬼は、ある意味被害者になってしまっているのです。鬼の子どもの言葉には、その悲しみが込められていることにはっと気づかされました。

こういったことは、昔話の中だけでなく、現代社会でも起こっています。

例えば、第二次世界大戦中の一九四五年八月六日・九日に原子爆弾、通称「原爆」が広島と長崎に投下されました。これによって日本は大打撃を受けました。一瞬にして多くの人々が亡くなり、その悲惨さに、「原爆」への許しがたい想いを多くの日本人は持っています。

しかし、原爆を投下した、戦勝国のアメリカでは「原爆投下のおかげで戦争終結が早まった。」や、「原爆のおかげで多くの米国人の命が救われた。」といった、原爆投下を支持する意見も多いという世論調査の結果があります。世界では、まだまだ原爆を支持したり、核兵器はとても強い爆弾で、必要な物というイメージを持ったりしている人もいますようです。これは桃太郎の物語でいう「鬼（日本）」を退治した「桃太郎（アメリカ）」からの見かた

です。

また、最近の例では、世の中で話題になるような事件や問題が起きたときの、インターネットのSNSでのトラブルです。世間が事件や問題を起こした人間を「悪」とみなし、一斉にその人物に悪意ある発言で攻撃することがあります。これをネット用語では「たたく」といいます。みんなが「たたく」から自分もその輪に入るとりあえず「たたく」など周りに合わせている人間がたくさんいるのだと思います。周りに流され、自分の見方を失っているのでしょうか。

事件や問題を起こした人間は世間にひどく「たたかれる」ことによって、精神的に追いこまれて、自殺してしまうケースもあります。事件や問題を起こした人間は被害者となり、「正義だ」と思って「たたく」ことをしていた人間はたちまち加害者となっています。これでは「めでたし。めでたし。」ではなく、新たな悲劇が起こっているだけです。

問題や事件、まして犯罪などは、決して許してはならないことだと思います。しかし、それをしてしまった人を「悪」と決めつけてその人を攻撃するのが「正義」とする一方的な視点からだけで物事をとらえ、周りのみんなと一緒にS N Sなどでその人を誹謗中傷することは、同じく許されないことだと思います。

本当の「めでたし。めでたし。」にするためには、事件や問題を起こしてしまった人は、二度と繰り返さないようにしっかりと反省すること。そして、周りの人たちはその人を「たたく」ことで退治するのではなく、しっかりと反省できる環境づくりをすることが大切だと思います。「罪を憎んで人を憎まず」です。

憎む心ではなく、人を思いやり支える心が本当の鬼退治につながり、明るい社会につながるのではないのでしょうか。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

ことばで心を救う

京都市立二条中学校 二年 浅井 瑳月

卑怯者。相手の顔が見えないから。誰の言葉か分からないから。そうやって文字にした言葉は、今日も誰かに悲しみと苦しみを与える。ムカつくから、イライラするから…。理由があつたら人を傷つけていいの？そうやって陰で言う奴は卑怯者だ。悔しかったら、表へ出てこい。

今、私達はとても便利な時代を生活している。スマホにパソコン・タブレットなど、どこにいてもいつでも世界中の人とつながることができる。会ったことがなくても友達になれるし、相手の顔が見えなくても自分の気持ちを伝えることができる。だけど、そんな便利な機能を悪用する人達がいる。「誹謗中傷」という言葉を聞いたことがあるだろう。根拠の無い悪口で人を傷つけることだ。ニュースで「誹謗中傷」が原因で自殺した人があるということを知った。そんな、顔も名前も分からない人に、誰かの人生を壊すことができているのか。それが簡単にできてしまうのだから恐ろしい。

なぜすぐに人を傷つけるようなことを書き込むのだろうか。一つは機能に問題がある。相手の顔が見えなければ罪悪感は無いら、自分が書いたと分からなければ自分の言葉に責任をもたなくて済む。もう一つ、大きな原因は、言いたい事や聞いてほしい事を受け止めてもらえない場所がないことだと思う。仕事に学業、人間関係…。今を生きる人達は本当に忙しい。変化の早い時代を、休む暇もなく、忙しい日々を通り過ぎるように生活している。そんな中で嫌なことがあつたり、ムカつくことがあつたら誰かに八つ当たりしたくもなるだろう。そう考えると、ネットは一つの「話を聞いてくれる場所」なのかもしれない。だからといって、思った事全てを自分勝手にぶつけて、人を傷つけることが正しい事にはならない。何気なく言ったそのたった一言で、毎日苦しみながら生活している人があることを忘れてはならない。

被害者を無くすために、今すべき事は何か。それは、誰の言葉かを突き止めることでも、その言葉を咎めることでもない。相手の言葉に耳を傾け、

気持ちを受け止めてあげる事だ。誰かを非難することは何の解決策にもならない。誰かを攻撃することもまた、傷つく人を生むことになる。人を傷つけた人は傷つけられてもいいということではない。だから、両方を守ることが大切なのだ。誹謗中傷を受けた人の心のケアはもちろん、誹謗中傷をしてしまう人の心の声にも耳を傾けなければこの問題は解決できない。

私の周りではクラスの八割以上がSNSを利用している。中にはLINEで「いじめ」を受けた人や「嫌がらせ」のメッセージを送られた人がいる。そんな時、私は最低だなと思いつつ、いつも考える。相手が一番伝えたかったのは、本当にその言葉なのだろうか。もしかしたら、本当は誰にも受け止めてもらえない言葉を、ぶつけたかったのではないか。ただ話を聞いてほしかっただけではないか。私はそういう人達の声にも耳を傾けたい。できるだけ多くの人の気持ちを受け止められる人になりたい。むしゃくしゃして誰かに話を聞いてほしくなった時、向かう場所はSNSじゃない。必ずあなたと向き合ってくれる人がいる。忙しくても、たまにはじっくり話を聞いてもらうのもいいじゃないか。「大丈夫だよ」「ありがとう」「大好き」。言葉は誰かを傷つけるための道具じゃない。誰かを幸せにするための言葉には魂が宿る。温かい言葉に溢れ、一人でも傷つく人が減り、幸せで明るい社会にしていきたい。

さっきは「卑怯者」だなんて言ってごめんなさい。誰だってつい言い過ぎることはある。そんな時は深呼吸をして、ゆっくり話をしよう。同じ時代を、もがき苦しみながら生きる者同士、きっと分かり合えるはずだ。あなたにも、心から向き合い、語り合える人が現れ、愛に包まれますように。

京都府推進委員会委員長（京都府知事）賞

「犯罪者」をつくらない社会へ

京都市立七条中学校 二年 杉村 佳乃

最近、私はテレビや新聞で報道されている事件、特に「殺人」や「不審者」による事件がどうすればなくなるのか考えています。

まず「殺人」です。テレビでは、加害者の動機がよく取り上げられています。

「誰でもよかった。」「イライラしたから。」

前者の「誰でもよかった。」は、特に理解できません。被害者には何一つ罪がないのに、全く知らない人の身勝手な行動により、突然人生を終わらされてしまうのです。「かわいそう」という言葉ですませてはいけないことだと思います。また、加害者の中には、三十年ぐらい服役した後、社会に出てくる人もいます。三十年で本当に反省できるのだろうか。形だけのものではないのか。全く関係のない私までイライラします。

誰かを殺したくなるようなことが起こった時、私ならどうするのだろうか…。

きっと私は人を殺めることはできないと思います。

殺人を犯した人も、もともとは私と同じ人間です。自分の中で色々なストレスが積み重なり、感情のはけ口を間違えてしまったのだと思います。しかし、そうなる前に誰かが異変に気づき、寄り添い、向き合えば、その人はきっと殺人を犯すことはなかったと思います。

次に「不審者」による事件についてです。

私は小学生の頃、習い事に行く道中で、知らない男性に声をかけられたことがあります。いつもは自転車なのですが、その日は雨が降っていたので、歩いていました。最初は無視していたのですが、その男性は執拗に追いかけてきて、私の手を握りました。その瞬間、私の頭の中は真っ白になり、動けなくなりました。でも、このままだったらいけないと思い、友達の家まで必死に走りました。男性は追いかけてきましたが、私が友達の家呼び鈴を鳴らしたのを見て、逃げていきました。その時、初めて「怖い」と

思ったことを今でも覚えています。その後、私はこの出来事を誰にも話さず、家に帰りました。しかし、家に着いて母の顔を見たら、ほっとしたのか涙があふれました。

翌朝、学校では、不審者のことが話題になっていました。でも、私は自分が体験したことを誰にも話しませんでした。恥ずかしかったのと、みんなから「怖かったね。」と言われるのが嫌だったからです。気遣うような言葉をかけられても、私の心の傷が癒えることはありません。だから、私はこれから先も、このことを話すことはないと思います。

あれから数年経ちましたが、私は今も当時と同じ習い事をしていました。雨の日はまだ少し怖いです。そして、体を触られたり、手を握られたりすると、あの時のことを思い出し、怖くなります。でも、いつまでもひきずってられないので、何も考えないようにして、その道を通っています。

このように、私は前に進めています。私のような体験をした人の中には、苦しんでいる人もいると思います。だから、私は悲しい思いをする人がいなくなるよう、社会を変えていきたいです。

犯罪や非行のない社会にするためには、罪を犯してしまった人が、なぜそのようなことをしたのかを考えることが大切だと思います。そして、犯罪や非行を未然に防げるように、互いのことを思いやって生活する必要があると思います。また、罪を犯した人が、自分がしたことを反省し、立ち直れるようなサポート体制を充実させる必要もあります。

このような輪を広げていけば、きっと社会は良くなり、非行や犯罪を減らすことができると思います。今すぐに実現させることは無理かもしれませんが、私が死ぬまでに非行や犯罪が少しでも減ることを願っています。私自身、人に寄り添うなど、誰でもできるようなささいなことから少しずつ実践していきたいです。